

【キーワード】

〔施設種別〕 ■高齢者施設 ■障がい者施設 ■子ども施設 ■住宅
 〔運営主体〕 □市区町村 ■法人 □NPO □個人 〔補助金〕 □内閣府 ■国土交通省 ■厚生労働省
 〔建物形式〕 □1棟単体型 ■複数棟集合型 □団地型 〔建物状況〕 ■新築 □増築 □改修 □一部改修 □既存
 〔対象者〕 ■高齢者 ■障がい者 ■子ども □ファミリー ■多世代



写真 1. 外観写真

サービス付き高齢者向け住宅、アトリエ付き学生住宅、児童入所施設等を併設した、高齢者、障害者、子ども等の様々な人が共に住むという「ごちゃまぜ」をコンセプトに、街としてデザインされた施設群である。敷地内には、温泉、レストラン、アルパカ牧場、ドッグラン、キッチンスタジオ、コインランドリー等があり、周辺の住民が気軽に立ち寄り、施設群の住民と地域住民がともに日常的な交流のある生活を楽しむことができる。

■施設概要

所在地：石川県金沢市若松町セ 104 番地 1

施設種別：サービス付き高齢者向け住宅

アトリエ付き学生住宅

児童福祉施設

戸建て住宅

共同住宅

児童入所施設 幼児・重度棟：22 名

自閉棟：9 名 自立棟：8 名

サービス付き高齢者向け住宅 32 戸

アトリエ付学生住宅 2 戸

学生住宅 6 戸

本館 デイサービス 15 名

生活介護 10 名

児童発達支援センター

児童発達支援センター 10 名

放課後等デイサービス 10 名

学童保育 40 名

運営主体：社会福祉法人佛子園

設計：五井建築研究所

敷地面積：35,766.96m²

延床面積：8,098.69m²

構造・階数：木造（22 棟）鉄骨造（3 棟）

運営開始：2014 年 3 月末



写真 2. 敷地周辺 googlemap より

金沢駅から約 6km 南東の小高い丘陵を上った住宅地のはずれに位置している。周囲には大学、商業高校、小学校などの学校施設がある。



写真 3. 敷地内街路

敷地内に U 字型道路や棟間を通る小道などがめぐられ、道沿いの街のような構成である。住民たちがお互いに譲り合うという「住民の交流」を創出する道幅がデザインされている。

参考文献

- 1) 「生涯活躍のまち」に関する取組事例集 平成 29 年 3 月 内閣官房 まち・ひと・しごと創生本部事務局（委託先：(株) 野村総合研究所）
参照 平成 29 年 11 月 28 日
- 2) 新建築 平成 28 年 7 月号 152 頁 -157 項
参照 平成 29 年 11 月 28 日



写真 4. サービス付き高齢者向け住宅

広さ 43m² 程度の 1LDK 型賃貸住宅。共有スペースも充実し、程よい距離で人との繋がりを実感できる。

元は国立の結核病院の跡地。更地にしてそのままにされていた場所を法人で活用することになった。もともと敷地内には大きな木が育っているなど開発後に育った自然が豊かだったので、その自然を活かして、なるべく木を切らずに建物を配置している。

■運営概要

社会福祉法人佛子園（以降、佛子園）は、障害者支援に関する事業を進めてきたが、未だなお障害者の存在が理解されておらず、真の意味でまちに受け入れられていないことを課題としていた。地域が抱える問題を解決するために取り組むべき課題としては「障害者が日常として地域に受け入れられていないこと」、目指すべきまちとしては「障害者、高齢者、学生等が共存する、住民自治の「ごちゃまぜのまち」というものが設定された。

「ごちゃまぜのまち」とは高齢者、学生、病気の人、障害のある人、分け隔てなく誰もが、共に手を携え、家族や仲間、社会に貢献できる街。かつてあった良き地域コ



図 1. 配置図兼一階平面図 (Share 金沢, 街ナビ, <<http://share-kanazawa.com/townnavi/>>)

サービス付き高齢者向け住宅、アトリエ付き学生住宅、児童福祉施設、戸建て住宅、共同住宅などの施設機能に加えて、地域に開かれた公衆浴施設、住民が運営する共同売店、カフェ、クッキングスタジオ、アルパカ牧場など「ごちゃまぜ」のコンセプトを基盤としたちいさな街となっている。U 字型の街路が通っているが、接道上 6m 幅となっており街のスケールに馴染んでいないことから、中央に住民のコミュニティ街路やせせらぎを設け、住戸の玄関・居間を全てそこに向けて配置している。多世代交流に即した配置計画を実践している。

コミュニティを再生させる街というものである。これらの掲げられた課題とコンセプトをプロモーションに移すべく、「住民の交流」に着目したまちづくりが行われている。

■まちづくりのプロセス

事業者の佛子園は、「ごちゃまぜ」のまちを構成する人々（障害者、高齢者、学生等）がそれぞれ活躍しながらまちづくりに参画できるよう、まちに必要な機能・サービスを担うプレーヤーを結集し、運営体制を整えた。Share 金沢では障害者を日常として受け入れてもらうことが必要だと考えたため、「住民の交流」を最重要要素として設定し、住民同士の交流が促進されるような環境整備・サービスの開発を行っている。共有部分の清掃、食事の一次調理等の幅広い職種を設定し、雇用機会を創出している。また、子育て相談室、料理教室、子供向けの自然学校、クリーニング等のサービスを提供する地域の事業者を巻き込み、Share 金沢でビジネスを展開する機会を作った。地域の人材を雇用し、地域の事業者を巻き込むことは、Share 金沢が「佛子園がつくったまち」ではなく、「住民みんなでつくりあげ、運営するまち」であることを表し、住民のまちに対する意識を底上げすることにもつながることが期待されている。

■補助金制度の活用

Share 金沢では、事業を稼働させるまでの間の初期費用を少しでも削除できるよう4つの補助金を活用した。

- 1) 障害児入所施設に関する補助（県から申請）
- 2) 障害者就労施設の整備に対する補助（市から申請）
- 3) 災害時避難場所指定に関する補助（金沢市の制度）
- 4) サ高住の整備に対する補助（国交省の制度、100万円×戸数の補助）

ただし、全ての資金を交付金・補助金に頼るのではなく、事業の黒字化までの期間を短縮化する目的で使用している。



写真 5. サービス高齢者向け住宅の共有リビング

コミュニティ街路に向けられたバルコニーと開口部、そして施設とはかけ離れた、家のような居間空間は住民の交流、多世代交流を促している。

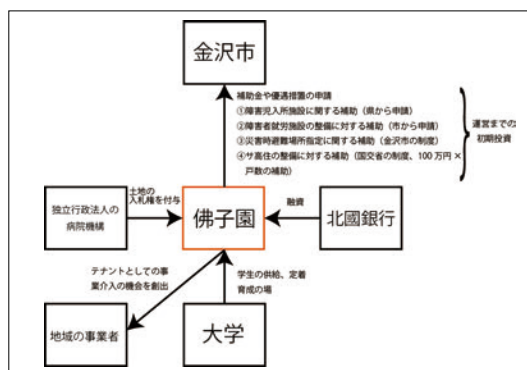


図 2. 運営体制

「生涯活躍のまち」に関する取組事例集 平成 29 年 3 月 内閣官房 まち・ひと・しごと創生本部事務局（委託先：（株）野村総合研究所）を基に作成。



写真 6. 温浴施設

社会福祉法人佛子園 Share 金沢ホームページより (<http://share-kanazawa.com>)

住民、地域に開かれた無料の公衆温浴施設。高齢者などの住民が「自分がいつも使っているお風呂だから」と掃除を自発的に行っている。

参考文献

- 3) 社会福祉法人佛子園 Share 金沢ホームページ
(<http://share-kanazawa.com>) 参照平成 27 年
11 月 28 日
- 4) 「生涯活躍のまち」に関する取組事例集 平成 29 年
3 月 内閣官房 まち・ひと・しごと創生本部事務局
(委託先: (株) 野村総合研究所)
参照 平成 29 年 11 月 28 日



写真 7. アトリエ付き住宅「キャンピングトレーラーエ
アストリーム」

美大生が創作に打ち込めるようアトリエ付住宅。必要に応じてアトリエは開放され、芸術を通じて住民たちとの交流が促されている。

■計画の立案とプロモーション

Share 金沢では、目指すべきまちの姿やまちのコンセプトに即した、地域の障害者、高齢者、学生等を住民とした。これは、住民像を明確にすることで、効率的なプロモーション活動を計画する事ができるようにするためである。また、プロモーション実施に伴い、プレーヤーの一部としての周辺の住民に気軽に足を運んでもらえるようなまちづくりを目指すため、まちの温泉施設を無料で使用できるようにした。また無料で使える地域を設定することで、プログラムに沿うプレーヤーとしての来訪者を限定した。高齢者が暮らすまちで、障害者が働き、学生がボランティアをしながら住み込み、子どもが学校帰りに遊びにくると、まちに活気が生まれ、高齢者への刺激にもなる、就労・社会参画・住民の交流としての機能を創出している。

例えば、学生が Share 金沢に住む条件として、「月 30 時間のボランティア」を定めることによって、近隣大学の学生と高齢者・障害者との交流を促進している。また、

◆ 街並みをつくるルール

社会福祉法人として児童入所施設などを手掛けてきたは、以前の施設の老朽化に伴い、新たな敷地を探していた中で、単一用途ではなく障がいを持った子どもたちが様々な人たちと交流できる、本質的にまちに溶け込めることのできる街の計画を求めて、設計者に依頼した。敷地は国立病院の跡地である金沢市内の土地を入札して取得し、新天地としてゼロからつくりあげた。廃院になってからかなりの時間がたち、敷地は荒廃していたが、敷地周辺の雑木林などの自然は良好な環境が保たれていた。これらの条件の上で、3つのルール計画に基づいた計画が行われた。

1) 一団地認定ではない建築計画

一団地認定では耐火建築物、または準耐火建築物の要件が求められる。しかしながら、緑豊かなこの敷地にヒューマンスケールの街並みを計画する際、木造の建物がふさわしいと考えられた。そのため、開発行為の際に敷地内を通る U 字型道路を建設し、市へ移管後、接道要件を満たした。一方、これは Share 金沢運営のための資金を調達するにあたって、資産価値を高められるよう、整備した道路を公道に移管するという土地利用の方法をとったという一面もある。

2) 建物の形状や規模、屋根の向きや色彩など統一を避ける

全ての建物を 2 階建以下に抑え、小規模の建物を分散配置し、スタジアムや 2 階建のサ高住など大きな建物は外周部に配

置した。平屋の隣は 2 階建て、前面道路に対して平入りになっている建物の隣は妻入りにと、街並みが均質にならないように配慮を行っている。

3) アプローチ路の作り方

敷地中央に建物の間を通るアプローチ路は井戸水を利用したせせらぎと共に計画を行った。この街路は住人だけではなく、散歩に訪れる近隣住民や学童保育に通う子どもたちも利用し、お互いが譲りながら通れる程度の道幅としている。



写真 7. 敷地一体を俯瞰する (Share 金沢, Share 金沢ってどんな街?, <<http://share-kanazawa.com/town/index.html>>)

計画のコンセプト「ごちゃまぜ」の街にするべく、屋根の向きや色彩の不統一、建物階高別に配置するなどを行っている。小さな街を作り出している。

住民にまちを利用してもらうための一つ的手段として、住民の一部に温泉を無料で提供することで周辺の住民もまちに來訪することによって、まちは住民同士が関わり合う、憩いの場としての機能も有するようになった。

(以上、作成者：東京電機大学 榎村賢 2018.04)

訪問インタビューの記録

訪問日：2015年2月8日、2016年6月4日（こちらの記録をベースに、以下にまとめる）

1. Share 金沢に繋がる経緯

Share 金沢は現在開設3年目で（2016.0604 訪問時）、1年半くらい経ってから、地域の人に関わってもらっての活動がいろいろできるようになってきた。例えば、小学校の子供たちが写生大会などで Share 金沢の敷地を使っている。

Share 金沢につながるのは、障害をもった大人の入所施設でありながら、仕事を提供することが大事である、という佛子園の理念である⁵⁾。地域における仕事づくりには以前から取り組んできた。その一つが、日本海倶楽部である。

□日本海倶楽部（→事例 472）

金沢は人口集積のある都市であるが、石川県の北部、奥能登は過疎地であり、そこで障害者が生活しようとする、地域から仕事をもらうことができないという事情がある。そこに住んでいる人々であっても仕事がなく、出稼ぎに行く人が多いという地域である。そこで、奥能登の地に障害者の生活施設をつくろうとしたとき、その地域に、障害をもった人と地域の人と一緒にできる仕事場を作った。このとき、橋本内閣の政権で地ビールブームだったので、地ビール工場をつくることにした。なお、社会福祉法人が就労支援の場をつくるということで、酒税も免除されることを期待していたがそのような

5) 社会福祉法人佛子園：現在の理事長（雄谷良成氏）の祖父がお寺の住職であり、お寺に戦災孤児を引き取って、一緒に生活したことがスタートで、紙芝居や運動会などしていた。その後、無認可では子供たちの生活を守り切れないと思い、1960年に社会福祉法人の資格をとった。そのころ、石川県から指導があり、知的障害の子供たちが入所できる施設がなかったので、知的障害児の入所施設という機能を担ってほしいという要請があり、知的障害児の養護施設を設置・運営することとなった。法人としては、障害があってもなくてもみな仏さまの子供であり、成長しながら、またその後も社会のなかで大人の人と関わられるようになると良い、という思いで運営している。このため、施設卒園後の居場所や社会的役割の創出という観点から、地域移行支援と共にグループホームの設置運営（現在21棟）と、就労の場所をつくる取り組みを行うようになった。これが、現在の佛子園が「働く場所」の創出と「障がいの有無によらない場の共有」の実践に取り組む原点である。



写真 2-1. 日本海倶楽部外観

洋風のしゃれた外観で、なかににはビアレストラン、ブルワリー（クラフトビール醸造所）、事務所、会議室等がある。別棟で小舎型の住まいがある。

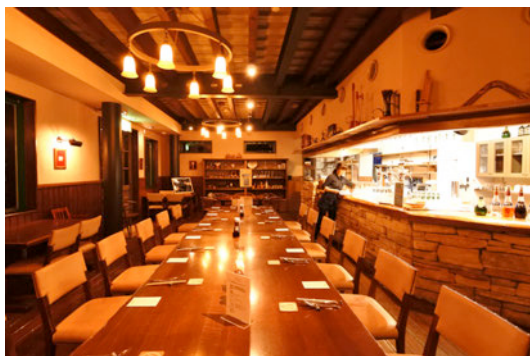


写真 2-2. 日本海倶楽部、ビアレストラン内観
各種ビールと料理が振る舞われるレストラン

優遇はなく、今日本海倶楽部では 2000 万円ほどの酒税を収めており、障害者の雇用を通じて産業創造や税制にも寄与することができている。障害を持った人が、仕事を通じて国に納税できるようになったということは、画期的だと考えている。

つくられているビールの品質にも自信を持っており、ブルワリーオブザイヤーを二年前にもらった。いまは県内外の 170 数店舗に「クラフトビール」として卸している。かねて、こうした生産品を提供する場も増やしたいと思っていた。地元での障害児者の生活と就労の場をつくることに尽力している法人ということで、依頼されて始まったのが山草二木西園寺である。



写真 2-3. 山草二木西園寺外観
廃寺を転用したコミュニティ施設

□山草二木西園寺（→事例 052）

野田町という小さな集落で、コミュニティの方たちに特化した福祉を徹底的にやる住民自治を目指した取り組みである。廃寺を再生し、旧本堂で高齢者デイサービスや障害者生活介護、厨房では障害者の就労支援を行っている。ここでは、日本海倶楽部のビールも提供している。また、地域住民は温泉が無料で利用できる。この西園寺で法人が発見したのが「ごちゃまぜの力」である。障害のある人も子供も高齢者も、DS 利用も温泉利用者も働く立場でも、いろいろな立場の人が同じ場を共有し、できることは自分でして、同じ時間を過ごしている。



写真 2-4. 山草二木西園寺内観
元・本堂がコミュニティレストランとなっている。隣接して設けられたキッチンが障害者の就労支援 B 型の適用を受ける。入浴施設やレストランは、障害者の生活支援（日中活動）や高齢者デイサービス利用者が日中に過ごす場所、子育て支援、学童の放課後の居場所ともなり、集落外からの訪問者なども含めて多様な属性の人々が「ごちゃまぜ」で過ごす空間である。

この野田町では、西園寺開設時には世帯数が 55 であったが、開設後の 7 年で 69 世帯に増えた。空き家に近隣から引っ越してきたのは、2～3 世帯で、世帯増の大きな要因はそれ以上に「出て行かなくなった」ことである。従前、小松市の就職が決まった若い人は、金沢の職場の近くや、にぎやかなところに引っ越してしまうという状況が続いていた。ところが最近は、昔から住んでいた家族のうち若い、結婚した世代の人たちが、地域内の別の家に新しい家族とともに暮らすようになり、地域に住み続けてくれるようになった。西園寺という、みんなが集まる場所ができたことで、町が再構築されていっている。

Share 金沢は、この西園寺を目指している。ただ、西園寺とは立地も違う（Share 金沢の方が都会的）ので、方向性は同じだが実現される空間には違いもあり、ヘビーユーザー、ユーザー、つながりのない家、というマーケティングをしている。

□ JR 美川駅 美川 37Work (→事例 478)

佛子園が JR 美川駅の駅舎運営を受託し、「美川 37 (みんな) Work」という名前で事業化している。これは、今は利用者が減ってしまっている駅だが、本来は交通手段が自動車でない人々(高齢者や高校生以下のこどもなど)、コミュニティにとって通いやすいところにあるという発想から、福祉拠点にしようという発想による事業である。法人は駅の管理、清掃、カフェやギャラリーの運営を、障害者支援事業として指定管理を受けて運営している。

結果として、もともと 800 人/日だった利用者に対して、電車に乗りに来るのではなくてカフェ利用などのみのために駅に来る人が、日に 400 人いるまでになった。いまは地域のおじいちゃんや学生さんなど、いろいろな人がいるようになっている。

JR の駅は、今は石川県に 4 つあり、障害のある人が働ける場所として活用されていていっている。しかし、障害者雇用はいっぺんに終わってしまう。JR に全国的に関わってほしいと思っている。

2. Share 金沢の立ち上げ

□ ごちゃまぜのまち

こうした、障害児への成長と生活の場、障害を持った人も一緒に働くことができる就労の場をつくるという取り組みのなかで、金沢市から西園寺での取り組みを活かして、CCRC、生涯活躍のまちをここでやってほしいという話があった。Share 金沢を、西園寺のようにしたいというのがいまの目標である。

Share 金沢の企画前に、法人として西園寺の事業を行っていたこともあり、Share 金沢をつくるときに「ごちゃまぜ」がキーワードとして挙げられた。これは、病気、障害の有無、世代に関係なく「ごちゃまぜ」でいられる場所ということを目指すというコンセプトである。

機能を「ごちゃまぜ」にすることで、利用者が顔を合わせていく。街としてつくられた Share 金沢の中の道は細く、うねっていることで利用者がお互いに関わり合いをもてるきっかけになる。敷地内にはドッグランやアルパカ、ライブなど年代に関係なく利用できる仕掛けがあ



写真 2-5. JR 美川駅 37 カフェ内観

駅の待合室を改修して、飲食を提供する店舗とギャラリーコーナー、イートインコーナーが設けられている。



写真 2-6. JR 美川駅での清掃活動

駅舎内のカフェやホール等の運営とともに、清掃活動などの維持管理の業務を、障害者就労支援を組み込みながら佛子園が担っている。

人が直につながり、支え合い、共に暮らす街 それが「Share 金沢」

高齢者、大学生、病気の人、障害のある人、分け隔てなく誰もが、共に手を携え、家族や仲間、社会に貢献できる街。かつてあった良き地域コミュニティを再生させる街。いろんな人とのつながりを大切にしながら、主体性をもって地域社会づくりに参加する。あなたも「Share金沢」づくりに参加しませんか。



写真 2-7. Share 金沢コンセプト文

社会福祉法人佛子園、シェア金沢、<<http://share-kanazawa.com>>、参照 2020.1111。



写真 2-8. 入り口の看板

いろいろな要素の「ごちゃまぜ」が表現されたシェア
金沢のロゴと、敷地内に入っているレストランや学童
保育等の事業が表示されている。



写真 2-9. ドッグランからサービス付き高齢者向け住宅

写真左手がドッグラン、中央の小屋が音楽教室（壁面にギターの画が描かれている）。右奥が集合住宅タイプのサービス付き高齢者向け住宅



写真 2-10. アルパカ牧場

ドッグランの隣にあるアルパカ牧場。児童養護施設のこどもがアルパカの世話に加わっている。

り、その中で利用する大人たちには「僕たちのこどもたち（児童養護施設のこどもたち）」に関わってほしい、と思っています。

□児童養護施設のこどもたちを中心とした発想

児童養護施設のこどもたちは日中は支援学校に行っている。日々、施設の人たちには関わっているが、それ以外の人たちに関わってもらうことがないまま、大人になっていくので、ここにいるうちに顔を見たら名前で呼ばれる生活ができるというのが理想である。

サービス付き高齢者向け住宅にいる学生は、子供たちの生活の担い手として、住んでいただきたいと思っている。職員と、サービス付き高齢者向け住宅の住人であるおじいちゃんとおばあちゃんとスタッフだけだと、地域の人々をこどもたちの生活に取り込めるかという懸念があった。そうした検討のなかで、情報や話が聞けて、地域の課題が一緒に取り組んでいける場所になったらと言う思いから、Share 金沢の企画を作っていった。

Share 金沢は、国交省の CCRC (Continuing Care Retirement Community) のモデルの一つとして取り上げられているが、最初から CCRC を目指していたわけではない。ここは、障害をもったこどもたちを中心に据えて考えていった場所である。

□特徴と今後の展開

西圓寺の設立の際に必要なとされたのは【施設型】だった。これは、限られた小さなコミュニティのなかでの地域福祉の拠点である。これに対して、一定の範囲内で「住む、働く、活動する」が総合的に提供される【エリア型】、また必ずしも広い土地を必要とせず、街にそもそもある移住住宅や医療福祉施設に、さらに新しくつくるなら空き家活用など、街のなかにある点を免にして CCRC にしていく【タウン型】があると整理している。

佛子園としては、これからは【タウン型】での支援展開が主流になっていくと思っており、タウン型推しで進めている。そして、そのなかでも拠点が必要が必要だと考えている。そうした拠点を中心に関われる人口は1万人くらいという感覚があり、これは小学校の校区くらいのイメージである。「具体的な名前は分からなくても、なんとなくわかる」程度のエリアに拠点があって、そこに

利用者が訪れやすいような仕掛けを作って、というエリア型の方が人を集めやすい。

佛子園の関連（直接運営だけでなく、ノウハウを提供して欲しいといわれて支援している事例を含めて）現在進めているプロジェクトは、以下の通り。

施設型：三草二木西圓寺，行善寺

タウン型：白山の B's プロジェクト，安芸太田，鳥取県南部町，岩手遠野町 遠野 BREW，宮城県岩沼市 IWARUMA WAY

エリア型：輪島 KABULET，Share 金沢



写真 2-11. デイサービスの入り口

温泉・レストラン入り口とは反対側に車での寄りつきが設けられている。

3. 空間・機能の特徴と取り組み

□全体のつくられ方

バス停，メイン駐車場の方向から本部棟（図 1，SOUTH 地区 S-1）に入ると，カフェごしの大開口から，傾斜のある敷地の高低差を活かしていまの街の様子を見渡すことができる。空間の作り方には，パタン・ランゲージ（クリストファー・アレグザンダー）を大いに参考にした。そのうち，これは「まちの様子が見渡せる場所（140. 街路を見おろすテラス）」という項目を参考に Share 金沢の様子がぱっと見渡せる場所をつくったものである。ほかにも，「町には狂喜の場所がある（58. カーニバル，90. ビアホール）」というので，酒場をつくったり。そういう風に，「まち」として必要な機能やあり方を積みあげた作っていったのが Share 金沢である。

□建物内部について

建物が面白くないと，人が集まる場所にならない。また，段差がないところの方が，逆に残存機能の維持に悪いということを聞いたことがある。段差はあるが，雰囲気によさと，一部スロープにすれば遠回りになるが，来ることはできる。一方で，考えながらつくっても完全バリアフリーに見えないと，やはり理解を得づらい部分もある。サ高住の玄関は，高齢者が入るときにバリアフリーでフラットになっていて，ベンチもある。本館の入口にはつけなかったがそこにもあった方が良かったと反省するところもある。

イメージ的には，元気な高齢者が，住みながら，棟に



写真 2-12. 本部棟内の物販コーナー

地域の特産品や近隣の農家の方が直接品物を売れる物販コーナー



写真 2-13. 本部棟内の物販コーナー

就労支援事業，産業創出の一環として，味噌や漬け物などを「西圓寺」ブランドでつくっている。それらも並ぶ物販コーナー。



写真 2-14. テーブルと席

「まち」を見下ろせるテーブル席。



写真 2-15. レストランの大開口から眺める街路

「まちを見渡せる場所」がつくられている。



写真 2-16. レストランのカウンター

市内に店を構えていた、人気のあったレストラン・ももやが数年前に惜しまれつつ閉店した。その主人に声を掛けて、こちらに新たに新店してもらった。オープンなカウンターから、活気のある厨房の様子が伝わる。

住んでいる人同士、仲良くして欲しいと思っている。このため、共有のリビングや共有キッチンなどをつかって、シェアハウスのようにしたいと思っていた。だが、人間関係は大事で、仲が良いときばかりではなく、もめるときもある。密度が高い関係性をつくりたいと思ったが、うまくいかなかったときに辛いこともある。

反省点として、共有の場所や共同玄関がありつつ、それぞれの個室からも出入りできる場所があったら良かった。そのような設計をやり始めて思っているところも多く、居室の中だとそのような空間構成になる。

プライバシーにも関係するが、共有リビングのカーテンは、レースだけにしておき、Share 金沢の街路からは雰囲気がかかるようにというコンセプトでルールをつくっていた。雰囲気が外から分かるようにということは今も続けており、こどもたちの棟から、その様子が分かれると良いなと思っている。

□高齢者への支援について

CCRC を中心に考えているわけではないかわりに、「ごちゃまぜ」なことで高齢者も様々な刺激をもらい、また役割をもつことで元気になれるのではないかなと思う。つまり、高齢者の方々が暮らしやすいことで、結果的に CCRC になっていると思っている。

高齢者に関する福祉サービスとして提供しているのは、「高齢者 DS」と「訪問介護」である。サービス付き高齢者向け住宅を初めてみてわかったことには、医療・看護のサポートも必要である。このため、今後医療法人格を取得して、訪問看護や診療についても事業を拡大する計画である。

地域との連携として、この地域では、独居高齢者の増加が地域の課題として認識されている。高齢者のうち、福祉サービスを受けている人の様子は分かるが、町会長、民生委員さんが、受けていない人の様子が分からない、わかりにくいということを課題と考えて、やや無理やりであっても迎えに行くことになった。そして、地域の高齢者、特にあまり出て行きたくないという人もまずは引っ張り出してきて、「茶話会」をしている。話し始めればそれが関係づくりに繋がっていくので、こうした茶話会に場所を使ってもらえる場所になっていることは良いことである。

Share 金沢では、子供と独居老人の両方が増えているという問題を一緒に解決していくことに貢献したい。西圓寺はそれが地域でできているので、この場所もその方向に育てていきたい。Share 金沢の周辺地域住民、この施設が立地する田上地区の地域住民に対する事業ができて、この場所に住み続けられるようになることが必要で、そのための「プラスアルファ」の部分をつくっていきたい。

□こどもへの支援について

こどもに関しては、地域に小学校就学時期のこどもが増えているため、敷地内に放課後学童クラブが2016年4月にできた。こどもの数が増えているのは、金沢市内でもこの周辺のエリアだけである。これは、この周辺地域で土地区画整理が進み、そこに市内外から新規居住者が流入している影響を受けての増加である。3年前は600人だったが、750人、800人と増えていき、来年は900人を超えることが統計からわかっている。2015年9月に校長先生に呼ばれ、「ぜひ学童保育をやってほしい」という依頼を受けて、障碍の有無によらずにこどもたちが一緒に遊ぶ環境は善いものだと考えており、また利用者の高齢者にとっては良い刺激にもなると考え、地域のニーズがあるならばということです承し、学童保育を開始した。

開設時の契約人数は40人である。利用開始時の40人の児童のうち、36人が1年生であった。この偏りは、待機児童が出ないようという対応を優先してこの事業を始めたためである。普通の学童保育所では、1～6年生までが対象となり在籍児童の幅があって、上級学生が下の子を見る中で、なんとか運営していくことができているはずなのに、上級学生が少ないという状況であり、安定するまでは運営に苦勞するだろうと思われる。こどもが一緒にいることでの問題もあって、露店風呂のお客から、石が降ってくるとクレームがあった。

この学童保育所は、アウトドア活動のNPO法人が運営しているという特徴がある。例えば、下校してきて着替えしたら火おこしをする。おやつは火を使う。マシュマロ焼いたり、竹パンを作ったり、ウィンナーを焼いたりしている。

□その他の特徴的な事業



写真 2-17. レストラン前の掲示板

レストランの前には掲示板があり、いきいきとした雰囲気演出している。



写真 2-18. 本棚のあるラウンジ空間

デイサービス側に設けられた、中庭に面した落ち着いた空間。誰でも使うことができる。



写真 2-19. フリースペース

何にでも使える空間。



写真 2-20. 入浴施設

温泉が掘られている。



写真 2-21. 外部テラス

ラウンジスペースに隣接するテラス

ボディケアは、こどもやデイサービス利用者には無料で、サービス付き高齢者向け住宅の住人には定額でマッサージを行っている。

料理教室（キッチンスタジオ）を行っており、地域の人等も利用しているが、ここでは障害児のための料理教室を行っている。卒園後の生活能力を高めること、また就労支援への移行を考えると、こうした取り組みは有効であると考えられる。

敷地内にある共同売店では、サービス付き高齢者向け住宅の住人が交代で店に立って、販売員や商品陳列等の仕事を行っている。こうした活動も、役割の創出や生きがいの元になっている。生きがいがあるとその年齢に対する生存率が高くなる、高齢者就業率は健康寿命と関係があるという研究が報告されている（「地域活動への参加率の高い地域は要介護認定率が低くなる」、日本版 CCRC 高層有識者会議 第1回を参照）。小さいことでも楽しく参加できるような地域になっていけば、結果的に元気になり、要介護認定率を落とすことに繋がると考えている。

4. Share 金沢での生活

□生活のコンセプト

参考にしてしている考え方として、①障害者にやさしい都市「障碍活躍の街」、②「高齢者にやさしい世界の都市ガイド」2007/10、WHO、③エイジ・フレンドリーシティ (AGE-friendly city) がある。こうした資料において暮らしやすいと言われている街を比較すると、8つの要素が整っている。

- ：交通機関
- ：住宅
- ：社会参加
- ：尊厳と社会的包括
- ：市民参加と雇用
- ：コミュニケーションと情報
- ：地域支援と保険サービス
- ：屋外サービスと建物

ここにはあえて入れられていないが、一番大切なのは、「住民の方々の協力や理解や応援があって」初めて、この8つの要素が整うということである。

この理解から、Share 金沢の開設に際しては積極的に外からの仲間を集めに行った。

佛子園は、数ある福祉法人のひとつである。その佛子園が施設運営において他と違いがあるとする、「圧倒的な交流人口」である。交流人口は、国交省の「生涯活躍のまち」でも、関係人口と共に重視されるコンセプトの一つである。佛子園の施設では、地域住民が日常的に利用することを積極的に誘発しており（従来の病院・施設には元気な人を集める仕組みがない）、それによってサスティナブル：持続可能な運用、日常性が実現する。また、住民自治のために、PCM（Project Cycle Management：海外援助プロジェクトで使用される、関係者の参加による計画立案・実施・評価の一連のサイクルを特徴とする事業管理手法）等の手法が活用されている。

佛子園がコンセプトに掲げている「ごちゃまぜ」とは、多世代共生のまちづくり、拠点づくりに通じるものであり、人々が混ざることによって新しいニーズが増えて、そこに対応する事業ができるという効果が観察されている。今後のまちづくりや拠点づくりには交流人口を高めていくことが大切である。

□ Share 金沢での生活

「ごちゃまぜ」のコンセプトのもと、例えばデイサービスでも利用者以外の人たちを巻き込みながら、ものづくりや交流会など、日常の中で楽しむことを大切にしている。

先述の茶話会は、独居高齢者の増加を背景に地域での支援体制づくりを目的として、今までに6～7回開催されている。次第に、連れ出されなくても自分で来られるようになってきた人もいる。

また、隣接する別の地域ではこどもが増えすぎて困っているという問題もある。Share 金沢の1万坪の敷地は4つの自治会をまたいでいて、それぞれに事情があり、困りごとにも異なる。そうした地域の実情に対して、それぞれの施設が対応していくので、どこの施設も持っている課題は同じではないと思う。

最近の出来事として、田上神社のお祭りで練り歩きのコースにShare 金沢を入れることになった。そのお礼をするという運びになり、施設のなかにある運動場で、このこどもたちと学校の子、おじいさんたち、低学年時



写真 2-22. 街路（西側：メイン入り口からみて奥）

左から、アルパカ牧場、ドッグラン、音楽教室、集合住宅タイプのサービス付き高齢者向け住宅。正面に見えるのがカフェバー。道路を挟んで右側が戸建タイプのサービス付き高齢者向け住宅群。



写真 2-23. 本部棟への近道

サービス付き高齢者向け住宅群のなかを抜けていける、スラロームしたパス。



写真 2-24. パス沿いの水路

サービス付き高齢者向け住宅群のなかのパス沿いに流れる水路。



写真 2-24. 敷地内街路 (googlemap より)

写真右側がバス停がある、メイン入り口（駐車場に見える緑色の四角がバス停の屋根）。敷地内にはU字型のメインの通り（U字に囲まれた中央がサービス付き高齢者向け住宅群）と、フットパスがめぐらされている。



写真 2-25. パスに沿って風景が移り変わる

パスに沿って、小さな広場やパスの交差する場所などが現れる。散策路としても楽しい小径である。

の親みなどと体育をしている。これはPTA、子供会へお願いしたのではなくて、地域子どもたちが気付いて自分たちで行ってくれるようになった。Share 金沢の利用者たちの間で自発的に、関わるの場所ができるようになってきている。

□住の機能：サービス付き高齢者向け住宅利用者・児童養護施設の傾向

サービス付き高齢者向け住宅にお住まいの方の出身をみると、現在 32 室、40 名程度の方がお住まいで、このうち 8 組と 21 名が県外の方である。金沢からの住み替え者が少ないのは、想定外だった。もともとは近隣の方々に入居していただく計画だった。石川県は富山県に次いで持ち家比率が高く、結婚して 30 歳くらいになると、家を建てないといけないというプレッシャーがある。結果としてローンを組んで住み、こどもは出ていき、広い家にひとりぼっちでもてあましているというようなケースもあり、住み替えニーズがあるだろうということは実感としてわかっている。このため、近くからここに住み替えてもらおうと、友人も掛かりつけ医もそのまま、住んでもらえるという形で提供するつもりだった。

そうしたねらいから、開設時の広報は、地元の地方紙にチラシを入れただけである。はじめのうちは、自分の家を不動産屋さんに貸して、Share 金沢に住み替えで入居する人が来てくれたが、地方創生本部ができて、首都圏からの移住が宣伝されるうちに県外の人が半分になってしまった。この経緯により、本来は地域の人と子供たちを対象にしていたのに、県外からの資料請求が増えて、あっという間に首都圏の人が増えた。実態としては首都圏、県外からの人の方が若く、早めの住み替えが行われている。このため、若くて元気な人が来てくれるので、結果的には本来やりたかった「ごちゃまぜ」になり、半分半分で良かったと考えている。

そうしたニーズがあるはずと想定していたが、県外からの方だけそのままにしていれば、なかなか地域に溶け込むのに時間がかかったと思う。県外の人に対しては、地域性という点では街を回る要素もあるので、兼六園だ、能登だ観光にも連れ回しているのが県外の人溶け込むのが早かった。

いろいろな人がいるので、希望があれば食事提供もし

ているが、例えばお醤油やお味噌の味覚がそれぞれ違うため、大変な部分もある。

県外からの移住者は、比較的若い方が多いということもあり、何かしようと思っている人が多い。移住前にカウンセリングをやっていた人が、ここでもやってみたいという担当したり、植木職人をしていたことがあったので樹木管理してくれたり、縁もゆかりもない分、結びつきたいと思ってきている。

児童施設は行政区の関係から、金沢市のこどもたちを対象にしており、基本的に県内のこどもが多い。また、Abuse への対応のために親御さんから離す必要がある、などの事情によって、県外からのこどももいる。

□こどもたちの Share 金沢との関わりを通して

子供たちがサービス付き高齢者向け住宅に七夕飾りをしに来てくれて、次の日の7月8日には撤去もして行ってくれた。そのようなことまで考えて、行ってくれるようになった。また、学校の先生に感謝している取り組みとしては、「地域の宝を探しましょう」という、各学年ごとに設定されたテーマでのフィールドワークを行っている。このうち4年生は Share 金沢を調べることで、夏休み後から、グループが三々五々やって来た。このような活動のフィールドにさせていただいていることを有り難く思っている。

子供たちが Share 金沢で過ごすことで、障害を持った人たちを特別視はしない大人になってきていると思う。いずれ、このこどもたちのうち、職員になってくれる人が出てくるかもしれない。長期的に見た施設や仕組みの継続という視点からも、人が育つ仕組みが内在していることは有り難い。

学校のマラソン大会では Share 金沢をスタートとゴール、周りをコースにして開催してくれた。応援にきた親御さんたち声をかけてみたら、そのとき初めて来たという人もいた。それは Share 金沢が開設されて1年半以上たったタイミングで、「ここにはレストランやお風呂があると知っていたが、障がい者の人がいると思うと足が向かなかった。来てみるといい雰囲気、今度またお風呂に入りに来る」と言ってくれた。学校イベントはこのような、地域の人々との接点になる。

保育所を作るとなると地域からうるさいからやめてほ



写真 2-26. アトリエハウス

アトリエになる建物と、トレーラーハウス。美大の学生に貸しており、学生は低廉な家賃の代わりに施設内のアート活動などをボランティアとして行う。



写真 2-27. キッチンスタジオ

人気のあるシェフによるキッチンスタジオ。料理教室が行われる。



写真 2-28. キッチンスタジオとカフェバーの間のテラス

元々の木々を残しながらつくられている。



写真 2-29. レストランの大開口から眺める街路
テラスには机や椅子が設えられ、屋外での飲食やくつろぎに使われている。



写真 2-30. カフェバーの内観
敢えて「そろっていない」家具が置かれている。近隣の方たちも喫茶やお酒を楽しみに来ている。

しいという苦情が出る、障害施設をつくるとなると思い込みからの反対活動が出るなどいろいろなことがある。Share 金沢があればここにくつろぎに来られるし、何かあれば相談に来られるので、Share 金沢の近くに成人障害者のためのグループホームを作ろうと思っている。そのために今度、住民説明会をする。そういった所からご理解いただき、理解するだけではなく何かできないかと地域の方も考えていただくような流れになっていくことで、そこに住んでいる障害のある人が一緒に幸せになっていく。説明と理解については、きっちり筋道付けることが大事である。

□共用空間の利用

共用空間での集まりには、田上の地域の人と、サービス付き高齢者向け住宅の人も参加している。利用者には、例えば地域にお住まいの最高齢 95 歳のおばあちゃんがあり、寝る前にモック（コミュニティカフェ）で一杯飲んで帰られるという習慣をお持ちの方。いまは少し杖をつくようになっている。Share 金沢内に住んでいるかどうかには関係なく、老いは順番に来る。高齢者に対するケアのあり方については、Share 金沢でというよりも、法人全体の問題になってきている。

5. 他との連携

金沢大学と組んでこれから動いていく COC+ の事業で、卒業生の石川県内の就業率 10% 向上を目指す。地域指向型教育や地域定借雇用増に向けた 5 年間の取り組みで行っていく。このプログラムでは、教育フィールドを ABC の能登・金沢・加賀、の 3 つの拠点にする。地方の若者が出生率が低いところに移り住むのだから少子高齢化が進んでいくのはあたりまえで、田舎の人間としては、首都圏に行かせないことが大事だと考えている。

具体的な連携内容は、以下の通り。

- ・ICT 教育カリキュラムの開発・実施：郷土理解、郷土愛、郷土定着。
- ・新インターンシップの開発・実施：地域の人と触れあうため（企業インターンシップも大事だが、学生に融資することも大切）。ここを佛子園でも担う。

- ・「共創インターンシップ」を，学生が中心となって，やっていく。学生たちや学校の先生たちが生涯学習や地域と社会を学んでいる。
- ・企業環境構築「innova-emotion」：石川県の全ての大学がやることになった

□医療連携

Share 金沢では，車で5分くらいの所の総合病院と委託契約をしている。また，すこし下にドクターモールがあるので，そこにかかりつけ医をもっている。それらと入居者をスムーズにつないでいくための医療部門が合った方が良いと思い，11月から本部に医療部門をもつ。

障碍児は，精神障碍などの症状コントロールのために強い薬を飲んでいることもあるが，これに関連する自分の状況をきちんと自分で話せないというケースもある。職員が児の様子をきちんと話すことによって，薬の処方などが変わるという実態がある。そのように，本人が話せない場合，代理で話した職員の話し方一つで処方やその影響による児の生活が変わってしまうところがあるので，職員がそれを代替することはこわいと考えている。

ドクターは，目線的には高いところから会話するので，対等にはお話できないということがある。例えば医療機関のドクターと，障碍のある人を適確につなぐときに，こちらにもドクターが居る方が良いと思って，医療法人をつくることにした。診療をするためでなくて，障がいのある人を地域につないでいくために，ドクターを置こうとしている。使い方をスムーズにすることが地域包括につながっていくので，つながるために，ポートをつくるのが大切である。

また，七尾では地域医療が進んでいる総合病院がある。そういうところとも連携しながらやっていきたい。

看護師さんは，国によってはドクターと同等の活躍をするという制度の国もある。そういった所を見て帰ってくると，日本では医療機関になんか勤められないという人も居る。知識や能力のある人材が，それを発揮して活躍することができる制度や，体制をつくるのが重要だと考えている。

(以上，作成者：東京電機大学 山田あすか 2020.11.11)



写真 2-31. ステージ

カフェバー内にある本格的なステージ。



写真 2-32. 共同売店の外観



写真 2-33. 共同売店の内観



写真 2-34. 共同売店のレジカウンター

サービス付き高齢者向け住宅の居住者が働く。



写真 2-35. 共同売店内のインフォメーション

売店内に机と椅子があり、休むことができる。その壁には収納の扉を黒板にしたインフォメーションコーナーがあり、シェア金沢内のお知らせなどが書き込まれる。



写真 2-36. ボディケアサロン

サービス付き高齢者向け住宅の居住者や、児童養護施設のことどもたちも利用している。



写真 2-37. スタジアム外観

全天候型スタジアムの外観。



写真 2-38. スタジアム内観

スタジアムの内観。人工芝が敷かれている。



写真 2-39. 自然学校など

左側が冒険遊びの NPO 法人とスポーツ事業者が入っている建物（カヌーが展示されている）。正面が本部棟，右側が戸建タイプのサービス付き高齢者向け住宅群。



写真 2-40. 児童通所施設外観

他の建物と同じようにデザインされており、溶け込んでいる。右奥が障碍児の児童養護施設。



写真 2-41. クリーニング&ランドリー
事業所としてクリーニングを営んでいる。



写真 2-42. サービス付き高齢者向け住宅の玄関
4世帯で共有される住棟の、玄関。バリアフリーにつくられている。



写真 2-43. 廊下
4世帯の住戸に続く廊下



写真 2-44. シェアされるリビングダイニングとキッチン
サービス付き高齢者向け住宅内の、シェアされるリビングダイニング。



写真 2-45. ソファスペース
共用空間部分にある、少人数で使える小さなリビング空間



写真 2-46. ミニキッチン
ミニキッチン付き住戸もある。扉で隠すこともできるようになっている。